TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特集
ICTの効果的な活用

巻頭エッセイ
語学は世界への入り口 …… 村治佳織 01

特集
ICT 利用の 8 つの指針 ― 英語授業でより良く活用するには …… 竹内　理 02
生徒の理解力を上げる ICT の活用法 …… 鈴木　悟 06
基礎学力向上のための ICT 機器の活用法
― 日野市と日野第二中の取り組み ― …… 尾形　斉・竹村きよみ 08
iPad を活用し英語科の授業に協働教育を …… 大西久雄 10

連載
英語教師のための基礎講座
授業マネージメントの勘どころ：“まなざし”の共有を求めて (1) …… 田邉祐司 12
評価クリニック　Can-Do リストをどう作る …… 根岸雅史 14
授業レポート　ICT と英語の授業 (2) ― 言語活動 (ペア・ワーク) …… 杉本　薫 16
小学校英語 Just Now
有効な小中の接続を目指して ― 足立区の小中連携への取り組み …… 畠山芽含 19
単語の文化的意味 80　road …… 森住　衛 21
Essay　Visualize it! …… Michael Carr 22
英語教師のリソース
聞いて「わかる！」を実感させる指導 ― チャンクの活用 …… 椎名紀久子 23

AROUND THE WORLD　日本語とエチオピアの言語の共通点 (Sidaama 語) [1] …… 河内一博 表紙裏
表紙写真について　多文化・多言語のシンガポール …… 鳥飼慎一郎 表紙裏

Vol.23
FALL 2012
SANSEIDO

AROUND THE WORLD 23

日本語とエチオピアの言語の共通点（Sidaama 語）[1]

河内一博　Kawachi Kazuhiro（防衛大学校）

不明瞭な表現

言語の専門家，またそうでない人たちによっても，日本語は特殊な言語であると言われることがある。しかし，その少なくともいくつかの場合は，英語をはじめとする欧米の言語やよく研究されている言語の視点から日本語を見ていて，他の言語を考慮に入れていないために，そのように思われるだけである。これからの連載では，エチオピアの中南部で話されている Sidaama 語（アフロ・アジア大語族のうちのクシ語族）のデータを紹介しながら（関連がある場合は英語についても述べながら），日本語といくつかのアジアの言語に特有と言われる現象が，このような地理的にも系統的にも遠い言語に存在することを示す。

今回のトピックは，「不明瞭な表現」である。日本人ははっきりものを言わないとか，日本語には不明瞭な表現が多くあるなどとよく言われる。実際には，はっきりと言うことができる場面であったとしても，特に文末をはっきりと言わないことがある。さらには，名詞句の指示対象や数量までもぼやかすこともある。例えば，「コーヒーなどいかがですか？」とか「オレンジを 10 個くらいもらえますか？」などという言い方をすることがある。これらの表現は，話し手の頭にあるものがそれぞれ，「コーヒー」という特定の飲み物，「10 個」という特定の数であっても使うことができる。このようなとき，Sidaama 語でも (1) と (2) のように言うことができる。

(1) bunú-gede　re　aga　hasi'ritta？
コーヒーの - よう　もの（複）　飲む　欲しくなった / あなた（女性）が

⇒「コーヒーのようなものを飲みたいですか？」

文字通りには，「あなた（女性）はコーヒーのようなものを飲みたくなりましたか？」

(2) tonné　burtukaané　geešša　aďa　dandeemmo？
10 の　オレンジの　程度　取る　できる / 私（男性）が

⇒「オレンジを 10 個くらいもらえますか？」

文字通りには，「私（男性）は 10 個のオレンジの程度のものを取ることができますか？」

このような表現は，頼んだり申し出たりする場合に，はっきりと言わないことによって，控え目で丁寧に聞こえるという原理を使っている。個々のストラテジーには違いがあるかもしれないが，原理は言語間で似ていて，日本語以外の言語で不明瞭な表現の例が見つかったとしても不思議ではない。（実は英語でも，*Would you like something like coffee?* や *Could I have about/around ten oranges?* のような表現を，丁寧に聞こえるようにするためのストラテジーとして使うことがある。）

表紙写真について

多文化・多言語のシンガポール

鳥飼慎一郎　Torikai Shinichiro（立教大学）

洋の東西を問わず，海峡というものは異なる文明が接触し，交わる場所である。アフリカとヨーロッパが間近に接するジブラルタル海峡やアジアとヨーロッパが行き交うボスポラス海峡などが好例である。マラッカ海峡も例外ではない。インド洋と太平洋を結ぶこの海峡は，古くから中国人，インド人，ポルトガル人，オランダ人，イギリス人などが交易上の利益を求めて訪れ，仏教，ヒンドゥー教，イスラム教，キリスト教が伝えられ，様々な国や民族の船が行き来したのである。そのマラッカ海峡の東端に位置するシンガポールはまさにこの海峡の歴史を絵に描いたような国である。

2 つの寺院が並んだ写真はシンガポールのリトル・インディアで撮ったもので，左側の黄色い建物は恆佛寺という中国仏教寺院で，右側の白っぽい建物はシンガポールの中国仏教とタイ仏教が融合した千燈寺院である。千燈寺院の正式名称は「シャカムニ・ブッダガヤ寺院」と言い，1927 年にタイから来たプティーサーサラ師によって建てられた。中に入ると，黄色い法衣をまとった高さ 15 メートルの大きな仏像が安置されている。日本の仏像とはかなり違った印象の親しみを覚える表情がいい。この寺院の道を挟んだ反対側には龍山寺という中国の道教の寺院があり，近くにはヒンドゥー教の寺院も数多くある。多民族，多宗教のシンガポールならではの光景である。

地下鉄に乗ろうと駅に行くと，英語，中国語，マレー語，タミル語の 4 ヶ国語で書かれた表示が目に入ってきた。シンガポールは多言語国家でもあることを気付かされた瞬間であった。

巻頭エッセイ

Opening Essay

語学は世界への入り口

村治佳織　Muraji Kaori

23歳のときに，スペインでギター演奏のDVD撮影をする機会がありました。せっかく映像に残るものなので，スペインの生活のにおいを自分の中にしみこませてから演奏したいと思い，撮影前の1ヶ月半の間，スペインの一般家庭にホームステイしながら語学学校に通うことにしました。

ホームステイ初日，スペイン語がほとんどわからない私に，ホストマザーはスペイン語しか話さないし，ホストシスターも，初対面の私に愛想笑いどころか，人目もはばからず彼氏と電話で大ゲンカ。感覚の違いにカルチャーショックを受けましたが，これぞ異文化体験。よし，がんばろうと思いました。

語学学校の授業もすべてスペイン語です。語学学習の達人である赤ちゃんをイメージして，どうやったら早く定着するか，自分でいろいろと考えました。わからなくても，とにかく授業を聞いて，家に帰ってからしっかり復習をする。目に入ったものを瞬間的にスペイン語で言ってみる。考えるときにも日本語を介さずにスペイン語で考える練習をしました。

それまで学んでいた言語といえば，中高で勉強した英語と，フランスの音楽学校に2年間留学したときのフランス語。どちらかというと，学ばなければならない状況で学んでいましたが，今回は違います。学ぶ姿勢が違うと，出会う人に対する姿勢や自分の行動も違ってきます。おかげで，英語・フランス語に比べて，スペイン語は速く上達しました。

語学は，楽器の演奏と似ているところがあります。楽器を演奏するときには，テクニックと表現力の両方が必要です。テクニックだけだと心がないと言われる場合もありますし，心や感情をうまく表現するにはテクニックが必要です。語学も同じで，文法（テクニック）の正確さばかりに気をとられると，せっかくのコミュニケーションがぎこちなくなってしまう。でもしっかりと話そうと思うと文法も大切。だから，ホームステイ先で家族と話すときは，間違ってもいいから習ってきたことを使って楽しく会話し，あとで文法を確認するようにしていました。スペインでのこれらの経験は，語学を学び，異文化を感じるいい経験になりました。

スペインや他の国々で異文化と出会うなかで，国や地域，そこで生きる人々や文化は一括りにできないと思うようになりました。日本にいると，「日本は」「スペインは」などとイメージを大きく捉えて話をしてしまいがちですが，実際にその土地へ行ってみると，もっと細かい要素が重なって，その街ができ，国ができているのだと感じます。人に関してもそうで，一人ひとりを知ると，一言で「スペイン人」では括れない。知れば知るほど多様性を感じます。

最近は海外に行ってみたいという若者が減ってきていると聞きました。国内にいてもたくさん情報が入ってくるので，それで満足しているのかもしれませんが，それが私にはもどかしく感じます。実際に自分の目で見たもの，聞いたこと，食べたものが，最終的には自分の中に残っていくのだと思うからです。世界へ出れば，違う文化に生きる同時代の人たちに会うことができます。100年後にはこの世にいるほとんどの人が違う人なのだと思うと，どんな出会いもすばらしい。若者たちにとって，語学は世界への入り口であってほしいと思います。

むらじ　かおり

東京都出身。ギタリスト。3歳からギターを始め，様々な国際コンクールで優勝ののち，15歳でデビュー。国内外のオーケストラとの共演も果たす。現在は演奏活動のほか，テレビ・ラジオ・雑誌などでも活躍。NHK「テレビでフランス語」に出演中。

特集 ICTの効果的な活用

ICT利用の8つの指針
― 英語授業でより良く活用するには

竹内　理
（関西大学）

1. はじめに

ICT（Information and Communication Technology[1]）の目覚ましい発展に伴い，昨今，英語の授業でも，各種ICT機器や教材を利用するのが，ごくあたりまえの光景となりつつある。しかし，それらの機器や教材をどのように利用するのかについては，まだまだ検討の余地があるものと考えられる。つまり，電子黒板が教室に入ったところで，先生の授業スタイルが変わらなければ効果的に活用することはできないであろうし，iPadを導入したところで，利用場面を無理矢理作り出すようなことをしていると，百害あって一利なしとなってしまうからだ。また，パワーポイントなどを利用した教材の準備に時間を割くあまりに，授業自体の組み立てをしっかりと考える余裕がなくなってしまうようなことがあれば，これはまさに本末転倒といわざるを得ないであろう。

このような事例を各地の学校現場で実際に目の当たりにして，ICT利用の指針をきちんと打ち立てておく必要があることを，筆者は強く感じるようになった。そこで本稿では，英語教育にICTをどう利用していくのか，あるいは，どのような心構えで取り組んでいけばよいのかなど，授業での利用指針となる考え方について，多角的に検討を加えていくことにしたい。

2. 振りまわされない

筆者の考える第1の指針は，「ICTに振りまわされない」ことである。「経費をかけた以上，その成果を目に見えるようにして示さねばならない。」このような無言の圧力のもと，ICT機器や教材の利用ありきで授業が組み立てられている事例をよく見かける。しかし，そもそも教育機器や教材は，教える側に必然性があって導入・利用されるべきものである。「こんな英語の授業を展開したい」「こんな英語力を生徒に身に付けさせたい」という青写真が頭の中にあり，この青写真に示されたプロトタイプを実現していくにあたり最適の機器・教材を導入するべきなのである。このスタンスを失ってしまえば，ICTは新奇性効果（Novelty Effect），つまり「目新しさ」により一時的に生徒の興味を喚起するだけのものとなってしまう。そのような一時的な効果を生み出すために限られた教育予算を投入してくのは，あまりにもむなしい。それゆえ，「何がしたいのか」「どんな能力を身に付けさせたいのか」という授業の目的を常に考え，ICTに振りまわされないよう，十分に注意していきたいものである。

3. 消耗品と考える

第2の指針は，「ICT機器は消耗品だと考える」ことであろう。iPad などのTablet PCを例にとると，その商品サイクルは長くて1年半程度と考えられる。つまり，1年もたてば新製品が現れはじめ，惜しげもなく投入された新技術により，旧製品はあまり価値を持たないものとなってくる。比較的長い期間，価値と寿命を保持してきたCDプレイヤーやカセットテープレコーダーなど従来型のメディアとは大違いなのだ。だからこそ，「生徒が破損してはいけない」，「教室の外に持ち出して紛失してはいけない」などと考えて後生大事に保管したり，使用に制限をかけたりするようなことはせずに，どんどん使い，どんどん（よい意味で）汚していくことが大切になる。特に管理職の先生がこのような考

えを持たない限り，生徒と接する教員は，どうしても管理のことを考え，使い方の面で萎縮してしまうことになる。寿命はせいぜい2～3年と考え，その間に使い尽くすことが ICT機器にとって最善の利用法であることを忘れないでいたい。ICT機器は果物や野菜と同じである。旬の時期に味わって食べないと，その栄養を最大限に摂取して生かすことができなくなるものなのだ。

4. 共有・再利用して，保存・蓄積する

機器は消耗品と割り切るが，教材に関しては「共有して再利用する」対象であると考えるべきであろう。デジタルの利点は，コピーと編集がしやすいこと。著作権に保護されている市販教材は別として，自作教材は積極的にシェアして，どんどん利用してもらい，フィードバックを得て改善し（あるいは他の人に改善してもらい），再利用するとよいだろう。本稿の冒頭でも述べたように，ICTのCはCommunicationのCであり，この機能を利用すると，意思疎通を促進して，教材開発の共同体を作ることも比較的容易に可能となる。同一学年・同一学校の先生たち，さらにもう一歩進んで，同一市内・地域の先生たちが，教材作成を通して相互に支え合う協働体制をつくるには，ICTは最適の特徴を有している。この特徴を積極的に利用して，教材のシェアとリサイクルを進めていきたいものである。

デジタル・メディアのもう1つの特徴として，劣化しない保存が可能という点もあげられる。将来，今の自分と同じ学年を担当する先生方のために，今年度利用した各種ICT教材を共有サーバー上に保管しておき，検索システムを充実させて再利用を促すことができれば，（彼らの将来の）教材準備の時間を大幅に短縮することが可能となる。そして，これにより浮いた時間で，授業内容をより深く考えたり，生徒と向き合う時間を増やしたりすれば，これも立派な「効果的」ICT利用といえるのではないだろうか。共有・再利用に加え，保存・蓄積も視野にいれて，ICT教材の活用を考えていきたい。

5. 常態化を目指す

4つ目の指針は「常態化（Normalization）を目指す」こと。「常態化」とは，そのメディアが環境へ溶け込んでいき，存在を感じさせないような状態となり，ごく自然に使えるようになっていくことを意味する（Bax，2003）。コンピュータ支援言語学習（Computer-assisted Language Learning：CALL）というものはあっても，鉛筆支援言語学習（Pencil-assisted Language Learning）や，書籍支援言語学習（Book-assisted Language Learning）などとはいわないのは，なぜだろうか。それは，コンピュータは常態化していないが，鉛筆や書籍は常態化して，誰もことさらその存在を意識しないようになっているためと考えられる。つまり，CALLのように特定の名前がついているうちは，まだ常態化されていないということになる。ICT機器や教材も，単なる「機器」「教材」と呼ばれないことから考えて，常態化からはまだまだ遠い存在といえよう。教員も生徒も，まだその存在を強烈に意識しているというわけだ。このような状況下では，円滑なICT利用はままならない。ましてや，（よく小学校で見かけるのだが）厚手の布でできた特製カバーをかけて電子黒板を大事に保護したり，通常教室に置くことを避けて，特殊教室に収納したりという状況では，常態化は夢のまた夢であろう。

存在を意識させないように普通に使うためには，利用者の態度変革と，ICTに関する知識や技能の定着が必要となる。生徒たちは，みなデジタル・ネイティブ（生まれた時からデジタル化された環境に囲まれている人たち）なので，あまり意識をしないだろうが，教員の方は母国がアナログの，いわばデジタル移民であるため，どうしても身構えてしまう。その上（あるいは，それがゆえに），操作知識や技能面で戸惑うことも多い。このような問題を解決するには，（利用者の）態度の変革に焦点をあてるよりも，まず知識・技能の定着を優先させ，「私もICTが使えるかも」という自己効力感（Self-efficacy）を教員に身に付けさせることが重要であろう。この自己効力感は，やがて授業で利用してみようとする動機につながり，この動機は，次に，態

度の変革をも生み出していくものと考えられる。

6. 人と人をつなげていく

5つ目としては，「時空を超えて，人と人とのつながりを高める際にICT利用する」ことがあげられる。当たり前の話だが，人と人が直接対話をできるような場面においてまで，ICT機器を利用しなければいけない必然性は何もない。そのような場面においては，ICT機器を使わず，肉声で直接コミュニケーションをしながら学習を進めていくのが一番であろう。しかし，ひとたび距離や時間の隔たりが介在してくると話が変わる。たとえば，遠く離れた地域にいる学習者同士で協働してプロジェクトを進める場合や，保存されている（前の学年の）先輩たちの産物（たとえばスピーチ）をモデルに学習するような場合，あるいは，学習者同士が，お互いの産物（たとえば英作文）を吟味してコメントを付け合うような場合や，学習プロセスの記録（たとえば複数回の音読の録音）を電子ポートフォリオに保存し，これを教師と生徒で振り返る場合など，距離や時間の隔たりを乗り越えて，人と人とのつながりを高めながら学習していく際に，ICTはその利点を遺憾なく発揮するのだ。

メディアはその原意（つまり媒介物）から考えると，人と人の間に立つものである。それゆえ，使い方を誤ると，人と人の間に立ちはだかり，両者の関係を断ち切るような悪しき効果を生み出すこともある。そうならないためにも，「人に参加を促し」，「人と人をつなげる」という考え方を念頭に，ICTを使っていきたいものである。SNS（Social Networking Service：mixiやFacebook，Twitterなど）が盛んに利用されているのはなぜなのか。この問いかけへの答え（の少なくとも一部）は，ICT利用の教育場面においても当てはまるに違いない。

7. 飽きずに，何度も繰り返す

ICTは確かに時空を越えた協働活動に有効である。しかし，もう1つ，人間には対応が困難と感じられる活動でも効力を発揮する。それは，「飽きずに，何度も繰り返す」という活動である。外国語を円滑に使うためには，コトバの使用の基礎部分を自動化していくことが重要である。この際にもっとも大切なのは，文脈の中に組み込んだ形で，完璧になるまで，何度も繰り返し練習をすることである。しかし，人は単純な繰り返しに弱い。ただ繰り返せばよいといわれても，なかなかこれを実現できない。これは学習者も教員も同じであろう。ここにICTの出番がやってくる。文脈の中で繰り返し生徒に練習させ，その成果を可視化（グラフなどにすること）を伴う記録とともに教員や学習者自身に送付し，進捗状況をチェックできるシステムは，ICTを利用すれば比較的簡単に構築できるのだ。また，従来のドリル学習とは違い，文脈を作り出すことにもICTは長けている。人間の弱点を補いながら，「飽きず，何度も繰り返す練習にICTを活用する」という考え方は，教室での発音・文型練習や音読練習のレベルから，e-learningによる文法・読解練習のようなところまで，広く適用できる指針といえよう。

8. 認知のメカニズムに合わせる

ICTを利用すると，音声はもとより，字幕から映像，アニメーションまで，自由自在に提示することが可能となる。たとえば，Skypeのようなテレビ電話システムを利用すれば，リアルタイムに対話者の動画像を提示し，同時に音声や文字の情報を送ることなど難なく可能となる。しかし，ここに大きな落とし穴がある。たとえば，学習の初期において音声に集中させる必要がある場合に字幕を出してしまうと，たとえそれが（日本語ではなく）英語の字幕であっても，注意がそちらに奪われ，英語の音声を「聞く」という行為はおろそかになる。加えて映像まで出してしまうと，その助けを得て，英語の音声（ひいては意味内容）が十分に理解できたような錯覚にとらわれてしまう。しかも，人間の認知（情報処理）のメカニズムから考えれば（竹内，2000），いろいろな刺激へ同時に注意を振り分け，そこに含まれた情報を次々にきちんと処理していくのは，とても難しい行為であることがわかる。裏を返せば，本当に英語の音声を聞き取る力を伸ばしたければ，その行為だけに集中して，練習を繰り返さなければならないというわけだ。「英語の字幕を利用しながらリスニングを教えていたら，結果として字幕の読解に集

中してしまったので，リーディング力が伸びて，肝心のリスニング力は伸びなかった」という笑い話のような結末を迎えないためにも，「認知のメカニズムを知った上で，それに合わせてICTを利用する」という原則は大切であろう。これと関連して，パワーポイントなどを利用する際に，効果音やアニメーションを付けすぎたため，注意資源がこれらに奪われ，教えるべき内容への注意がおろそかになるようなケースもよく見かける。ICTではいろいろなことができる分，情報過多になりがちである。こんな時代だからこそ，かえってシンプルを目指すべきではなかろうか。

9. 個別化を進める

8番目の指針として考えられるのは，「学習の個別化を進めるようICTを利用する」ということである。我々はどうしても一斉授業場面でのICT利用を念頭に，ものごとを考えがちである。しかし，それでは従来型のCDプレイヤーをiPodに置き換えるだけの利用法となる。また，一斉授業でICTを利用する局面にはどうしても限りがある。しかし，「新しい酒は新しい革袋に」の聖句の通り，一度考え方を根本から変えて，学習者に個別対応をするための道具としてICT機器や教材をとらえてはどうだろうか。一斉授業で遅れをとった生徒や，それでは物足りない生徒のそれぞれに教材を別途配布し，個別のニーズに応えるものとしてICTを利用すれば，利用場面は飛躍的に広がる。そればかりか，いままでの方法では対応しきれなかった部分，つまり，不足しがちな学習時間を補うための（個別の）家庭学習の手段としてICTを利用していくことも考えられる。中学校における教室での英語学習時間は，めいっぱい授業時間を利用したとしても3年間で420時間にしかすぎない。これを24時間で割ると，たったの17.5日にしかならないのだ。1つの外国語の初級習得段階に達するためには1,200時間（50日程度）の学習が必要だといわれていることから考えても（竹内，2007a），420時間はあまりにも少ない。従って，ICTを利用した家庭学習を導入し，これを教室での一斉授業とうまく組み合わせることにより学習時間を確保しようとする試みは，今後ますます重要となろう。[2]

10. おわりに

本稿では，ICTを使う際に教員側のスタンスがブレないよう，8つの利用指針を提案して，英語教育におけるより良いICT活用のあり方について検討してみた。そこにICTがあるから（場当たり的に）使うというのではなく，確固たる方針のもと，目的をもって，最大限にICTの利点を生かすように活用する。このようなスタンスを崩さないように気をつけて，積極的にICTの利用を推進していきたいものだ。

ICT活用のチェックリスト

- ☐ ICTに振りまわされない
- ☐ 機器は消耗品と考え，どんどん使う
- ☐ 教材は保存・蓄積し，共有・再利用する
- ☐ 常態化を目指す
- ☐ 人と人をつなぐ
- ☐ 繰り返しに利用する
- ☐ 認知のメカニズムに合わせる
- ☐ 学習の個別化を進める

注

1. 本稿では，ICTを（コンピュータなどの）デジタル・メディアと（インターネットに代表される）コミュニケーション・メディアの組みあわせによる技術革新のことと定義する。
2. このような試みを「授業の円環」（竹内，2007a/b）とよぶ。

【参考文献】
Bax, S.（2003）. *CALL —Past, present, and future. System, 31,* 13-28.
Kern, R.（2006）. *Perspectives on technology in learning and teaching languages. TESOL Quarterly, 40,* 183-210.
竹内　理（編著）（2000）.『認知的アプローチによる外国語教育』東京：松柏社
竹内　理（2007a）. 自ら学ぶ姿勢を身につけるには *Teaching English Now, 8,* pp. 2-5.
竹内　理（編著）（2007b）.『CALL授業の展開—その可能性を拡げるために』東京：松柏社
竹内　理（2008）. 教育メディアの活用力をつけよう！『英語教育』7月号，pp. 32-34.
Ushioda, E.（2011）. *Language learning motivation, self and identity: Current theoretical perspectives. Computer Assisted Language Learning, 24,* 199-210.

特集 ICTの効果的な活用

生徒の理解力を上げるICTの活用法

鈴木　悟
（東京都小笠原村立小笠原中学校）

1. ICT活用で悩み解消

○ 教師がプリントや教科書で説明している箇所を見つけられない。
○ 教師の説明が理解できず，周囲に確認しないと課題に取り組めない。
○ いったん理解できなくなると課題への取り組みをあきらめてしまう。
○ 習熟度別学習等でリーダーとなるべき生徒が少ないため，学習意欲がわかない。

このような生徒に対し，机間巡視で個別対応し支援していくことによって，前向きに取り組めるようになることも少なくない。しかし，１時間の授業のなかで１人の教師が支援できる人数と時間は限られている。さらに，授業時数や進度まで考慮すると，個別指導に多くの時間は割けず，生徒に十分な支援ができているとは言いがたい。

これら一連の問題を解決するための手段としてICTがある。ICTの適切な活用は，生徒にも教師にも大きな効果を生む。ここでは実物投影機，プレゼンテーションソフトの活用について紹介する。

2. 実物投影機

実物投影機（書画カメラ）は，生徒が手元で見ている教科書やプリントをテレビ画面（スクリーン）にそのまま映し出すことができる。教師は画面を指示しながら説明するので，生徒は口頭による説明に加えて視聴覚的にも説明を受けることとなり，個別指導されているような感覚になる。

その結果，教師は説明を短時間で済ませられ，他の活動に多くの時間を割くことができる。また生徒は，「自分の力で取り組める」「授業についていけている」感覚をもてるため，不安が取り除かれ，授業への集中度が高まっていく。

とくに肝心である１年生の入門期。身の回りにあるものの英語（教科書使用）の導入・展開，文字指導（ペンマンシップ使用）では大文字・小文字・文の書き方など基本的な内容をスピーディーに進める必要がある。ここで実物投影機を用いると生徒はしっかり授業についてくる。私の経験では，授業に迷う生徒はいなくなっている。

必ず行われる教科書本文の説明。年度初めに，教師が本文に直接説明を書き加える様子を映し出すことで，生徒はメモの取り方を知る。また，傍線の引き方や直線と波線の使い分けなども確認できる。メモの取り方を習得すると他教科の学習にも役立つ。

その他，プリントを使った説明やワークの答え合わせ，英作文の添削，スピーチ発表の際の写真等の提示，卒業生の作品（壁新聞等）の提示など，授業のすべての場面で実物投影機が使える。

実物投影機を使うことで「できる生徒の思考を削がないか」との懸念もある。しかし，生徒の視線を観察していると，英語が得意な生徒は実物投影機の助けを借りずに自力で取り組んでいる。

また，「実物投影機を使うことで英語のinputの妨げにならないか」との懸念もある。これを払拭するためには，実物投影機を活用する場面を絞ることが必要である。主に教師が日本語で説明する場面に限定し，生徒に英語を聞かせたい場面では，次項で紹介するパワーポイントを有効に使う。英語を聞く量が減らないような，英語をしっかり聞きとらせるような指導手順，授業計画が必要となる。

実物投影機の活用場面は徐々に減らしていき，最終的には，実物投影機のない教師の口頭の指示や説

明だけで，生徒が授業内容を理解できるようにすることが肝心である。

3. プレゼンテーションソフト

プレゼンテーションソフト（以下，パワーポイント）は，新教材導入の際にそのメリットが際立つ。

授業の中で教師が最も力を入れ，生徒に最も集中させたい場面は新教材導入時である。一方，それは生徒の不安がもっとも高まる場面とも言える。ここでパワーポイントを使うことで，スライドによるわかりやすい導入・説明が可能になり，生徒の集中力も高まり，教師との言葉のやりとりも活発になる。

教師にとっては，手間の軽減がもっとも大きな利点といえる。少人数学習の増加に伴い，1 人の教師が複数の学年を教える機会が増え，その分教材準備に費やす時間と手間が増えている。また，時間をかけて作った教材も，その保管に困ったり，翌年使う際に見つけ出したりするのに苦労することもあるが，教材をパワーポイントのスライドにすれば，これらの問題は解決できる。なぜなら，作った教材はすべてデジタルデータであるため，保管に場所を取らず，修正・変更が簡単で，検索性が高いからだ。授業で復習する際や次年度に使う場合には，ファイルを検索し修正を加えるだけで，繰り返し使うことができる。準備段階で教材の提示の流れを確認できるため，授業では，絵を貼る位置にも，（教師の）発話のタイミングにも気を遣わなくて済む。生徒全員の顔を常に見て，理解をつかみながら授業ができる。

さらに，デジタルデータであるため，同僚や他校の英語教師とのファイルの共有・交換が簡易であり，より完成度の高い導入教材の作成が可能である。

何をデジタル化するかは簡単で，これまで黒板に貼っていたものを，そのままスライドにするだけである。文法導入・オーラルイントロダクションで使う写真をコピーしてスライドに貼りつけたり，必要に応じて文字や記号をスライドに挿入したりする。

黒板と違い，「一度に全体が見られない」「全体の流れが確認できない」などの欠点もあるが，授業の終わりにスライドのコピーを配布することで，十分にその欠点を補える。スライドのコピーは，家庭での復習やリプロダクションの練習にも使える。

また，教師が授業でパワーポイントを積極的に活用することで，生徒が他の授業でプレゼンテーションを行う際のモデルを提示していることにもなる。ただし，前述のメリットを享受するには，プレゼンテーションソフトを難なく使えることが大前提となるが，生徒でも数時間で操作可能なソフトであるので，教師がそれほど心配するには及ばない。

私がパワーポイントで授業をし始めた頃，多くの方々から以下のような助言を頂いた。「パワーポイントの 1 枚のスライドに新しい情報（画像）量が多くなると，生徒の意識が絵に集中してしまい，教師の発話に集中しなくなる。結果として，教師が教えたいことから離れて，聞かせたい文（ターゲット文）を聞き流してしまう。」これを踏まえて考えられるスライド作成のポイントは以下の 2 点である。

①1 つの画面を作成する際，必要以上に情報（写真・文字）を入れすぎないこと（写真や文字の精選）。

②アニメーション効果の使用は，極力控えること。

4. ICT 活用は，生徒自立の一手段

ICT は，使うことが目的ではなく，ICT を活用することで，生徒の授業「内容」の理解が深まり，生徒の自立の一助となることが目的である。授業がわからなければ，家庭学習や自学自習の習慣も身につかない。ICT は「授業をわかりやすくする」＋「生徒が自力で解決できる能力を身につける」ことを助け，自学自習を習慣化する一手段なのである。

「ICT を活用しても『授業』であることには変わらないということです。したがって優先されるべきは，情報技術より授業技術になります。子どもたちがわかったとか，できたとか，あるいは深く思考したとかいう状況にならなければ，派手な ICT を使っても価値はありません。」（堀田龍也；玉川大学教職大学院教授）

生徒の学習状況・発達段階に応じて ICT を計画的に活用することは言うまでもなく，ICT を生徒たちの思考・判断・表現する機会を生み出す手段として効果的に活用できれば，言語活動が活発になり英語力を高めることにつながっていくと考える。

【参考文献】
高橋 純，堀田 龍也（2009）.『すべての子どもがわかる授業づくり―教室で ICT を使おう』高陵社書店.

特集 ICTの効果的な活用

基礎学力向上のためのICT機器の活用法
― 日野市と日野第二中の取り組み ―

尾形 斉・竹村きよみ
（東京都日野市立日野第二中学校）

1. はじめに

日野市では，早くから教育の重点施策の1つとして，ICTの活用教育を掲げてきました。平成18年度には全教員に1人1台のコンピュータの配置，平成19年度には全小・中学校の校内LANの整備，校務支援システムの完全導入を行いました。基本方針は「市内のすべての小・中学校で，すべての教員がICTを活用した指導を実施できるようにする」ということです。重点施策とした趣旨は，「ICTの活用は生徒の学力向上を図るための効果的な方法の1つであるゆえ，生徒も含め，誰もが日々進歩し続けるICTをしっかり使いこなさなければならない」というものです。

ICTを活用した授業によって，生徒の授業に対する興味・関心が高まるだけでなく，体験を通して知識が定着するなど，指導法の工夫によってより効果的な生徒の学力の定着が期待できます。また，校務支援システムを導入することにより，校務の情報の共有，効率化，生徒指導の連携等，教育の質の向上を図ることが大きな利点であると考えてきました。

本市ではさらに，文部科学省の平成21年度の「スクール・ニューディール」政策を活用して，全教室に52インチTVを設置し，電子黒板として利用したり，書画カメラを接続したりして，授業でのICT活用を推進してきました。また，ハード面だけの整備だけでなく，ICT推進室を立ち上げ，ソフト面である活用のために，支援員としてメディアコーディネーターを配置し，学校に出向いてパソコンやネットワークを活用した効果的な授業のあり方を先生方と共に考案し，授業における支援体制を構築してきました。

このような状況下で，市内の各小・中学校それぞれが校内で研究し，ICTを活用した授業実践を進めています。

2. 本校の取り組み

本校では，重点目標として，「生徒の基礎基本の重視と学力の定着」を推進しています。サブテーマは「ICTを活用した授業を実践し，学習意欲の向上を図る」ことです。そのためにこれまでの3年間，継続して校内研究として，ICTを活用した授業研究を行っており，外部から指導者を招聘し，生徒の学力定着のためのICTの授業研修を行ってきました。

ハード面では，本校は，教科教室型の授業形態をとっています。9クラスの小規模校の利点を活用して，英語科・数学科は3教室，国語科・社会科・理科は2教室，および実技教科にそれぞれの授業教室を配置し，それぞれに52インチTV，パソコンを設置して，いつでも自分の授業でパソコンやインターネットを活用できるように，環境整備を行っています。生徒は教室移動をして授業を受けています。

しかしながら，ICTを活用した授業では，授業を実施する教師の意識が，最も重要な要素です。環境整備に加え，教師それぞれが，ICT活用の利点をしっかり認識することにより，教材研究が充実したものになると考えられます。

本校では英語科を中心に，5教科ではほとんどICTを活用しています。特に英語科はデジタル教科書を常時活用した授業を実践しています。

以下，本校の英語科におけるICTの活用法について述べます。

3. 指導用デジタル教科書『NEW CROWN デジタルテキスト』を使ってみよう！

デジタル教科書のアイテムは多彩です。

【ムービー】各レッスンのはじめに用意されています。生徒は皆，何が始まるのかとわくわくして画面に集中します。静かな音楽とともに映像が流れてくると，2 分弱のその世界に引き込まれていきます。ときには映像を見ながら，ときには映像終了後に生徒とやり取りをしながら本文に進みます。

【ピクチャーカード】Oral Introduction に最適ですが，ほかでも大いに活用しています。例えば，本文 1 ページを学習したあとの dictation の小テストでは，カードを見せながら本文を聞かせ，書かせたい英文のところで音声を止めます。生徒は，最後に聞こえた英文を書きます。いつ本文が止まるかわからないので，とても集中して聞いています。自動的にカードが次の場面へと自然に切り替わり，本文の英文の音声もつながっていくので，USE Read のような長い文でも，生徒たちの理解を助けることができます。また，復習として reproduction を行うときにも効果的です。カードの一覧を見せておき，生徒たちはペアで練習させ，最後にカードを見ながら，グループやクラスで発表させます。

【フラッシュカード】英語と日本語の組み合わせなどを自由に設定できるので，ランダムに日本語だけを表示することにより，単語テストに活用できます。

4. その他の ICT の活用

新しい文法事項を導入するときには，パワーポイントや動画で自作の教材を用いることが多いです。左は 3 年生の現在完了（完了用法）を導入するときに使ったものです。写真を見せながら，① He is going to eat a sandwich. ② He is eating it. ③ He has just eaten it. 文字は後から確認するときに出すようにしています。

画像や動画のモデルは本校の教員にお願いしています。こういう意図でこういう場面を，と相談すると様々なアイデアが出てきます。

また，授業中の writing 活動の中で，いい作品は他の生徒たちにもどんどん読ませたいと思っています。口頭での発表では，それを聞く生徒によって理解の差が出ます。いい作品をまとめ，印刷して配布することもありますが，その場で生徒の作品を見せたいときには，書画カメラやタブレット型の PC で生徒の作品を撮り，52 インチ TV につないで生徒に見せながら解説しています。その作品を見ながらグループで相談し，内容をつけ加えたり，その後のストーリーを作ったりすることもできます。また，スピーチや Show and Tell などの活動のときにも，写真などの見せたいものをクラス全員に見せることができます。これらの機器は，*Book 2* LESSON 1 USE Write「春休みの思い出」，LESSON 8 USE Mini-project「世界の国を知ろう」，*Book 3* LESSON 5 USE Mini-project の「日本紹介」などの活動で活用できます。

5. ICT をどう使うか

授業の中で ICT を活用するようになって，黒板に向かうことなく，常に生徒の顔を見て授業をすることができるようになりました。また，テンポよく授業を進めることができ，生徒の発話量が増えました。大切なのは，ICT を自分の授業の中の，どの場面でどのように活用していくかということです。機器に振りまわされることなく活用していくためには，生徒にどんな力をつけさせたいのかを考え，まずは「使ってみること」です。パソコンが苦手，生徒数が多い，使用環境が整っていないなど，現場にはさまざまな課題があるでしょう。ICT を活用すれば，世界中のものを生徒の目の前に広げられます。CD デッキ，紙のピクチャーカードやフラッシュカードなどの山のような荷物を持って，廊下を歩く労力も軽減されます。今後も英語科教員として，ICT を積極的に自分の授業に取り入れる前向きな姿勢と，生徒たちが生き生きと活動する授業のアイデアを持ち続けていたいと思います。

特集 ICTの効果的な活用

iPadを活用し 英語科の授業に協働教育を

大西久雄
（埼玉県越谷市立大袋中学校）

1. ツールとしてのiPadを使う意義と前提

本校では，英語の授業に限らず様々な教科でiPadを活用している。その使い方，教材は教科で異なるが，共通している約束事がある。1つは，班や複数で1台使用すること（これはiPadを提供いただいている近隣大学からの台数制限があることも大きな理由）。そしてもう1つは，iPadに入れる教材はドリル的なものよりも，考えたり発表したりするものを重視することである。本校がiPadを積極的に活用している上で存在するこの2つの暗黙の前提は，「生徒の相互啓発活動」を重視するためである。

昨今のICTを教育現場に導入することに反対する論陣の多くは，デジタル教育が生徒間のコミュニケーションを阻害することを危惧している。デジタルを使った教育は自己完結してしまうと信じ，学びのダイナミズムが損なわれる，とまで言われている。彼らの心配の向きもわからないでもないが，ICTの使い方次第である。「使うことがメインではなく，あくまでツールとして使うことを大前提とし，使う意義を明確にすることで効果的な授業が創造できる」と本校では前向きに考え，使用を奨励している。

では，「生徒の相互啓発活動」を重視するとはどういうことなのか。デジタル教材は凝ろうと思えばとことん作り込めるものである。そして個人の手元で何回も再生でき，わかるまで見続けることもできる。これが，反対派の危惧する自己完結の典型であろう。

本校の教材は，簡単でかつシンプルなものが多い。特に英語授業においては，写真や絵，簡単な英単語等である。生徒たちは班，あるいは2，3人のグループで，iPadを使ってこれらを見合い，互いに考え，互いの思いをぶつける場を創っている。これを生徒間の相互啓発と呼び，iPadを提供いただいている近隣大学との共同研究のテーマにもしている。

デジタル機器，特に手元で簡単に操作ができ，再生やプレゼンにも適するiPadを，言語活動の充実に資する目的で使用する，そんな英語授業での実践事例を3つ紹介したい。

2. 【実践事例①】 固定観念を破る－「世界の朝食」で発見や驚きをまとめ，発表する

最初に3年生の事例を紹介する。生徒は自分たちの毎朝食べている食事に疑問を持つことは少ない。と同時に，世界でも同じようなものを食べていると思いがちであり，まさしく固定観念に囚われている。担当の高橋教諭は，世界の国々ではどんな朝食が摂られているのか，そこから得られる発見や驚きで生徒の相互啓発の場を創ろうと設定した。Web等から世界44カ国の朝食の写真をiPadに入れ，各班1台使用し，それらを生徒たちは見合って，興味を覚えたもの，食べてみたいものを生徒間で話し合い，それを英語で発表するのである。

まず，教師が大型テレビにiPadの画像を提示し，手本を示す。3年生なので，既習事項はできるだけ使用することを条

件に，自分たちの班のおすすめ朝食はこれと映像を提示し，どこがお気に入りかの理由を示し，5 文程度の英語にまとめプレゼンを行う。

これも素材は単純で，44 枚の写真が iPad にあるだけである。それをもとに生徒たちは話し合いを重ね，英文を練り上げていき，そして発表文章を作成する。iPad を手に掲げてプレゼンする際には，原稿を見ることができないため，生徒は英文を覚え，写真を示し，聴衆を意識しての発表ができるのである。

3.【実践事例②】 思いを馳せる－「そのときの気分は」推測や慮りで考えをまとめ，発表する

次に 2 年生の事例を紹介する。iPad に 23 枚の写真を入れておく。これらの写真には，喜怒哀楽を示す芸能人，アニメキャラクター，スポーツ選手等の顔が写っている。これを使い，“This is ○○○. He (She) looks happy (sad,angry, etc.).”と紹介し，その後に理由を述べるように設定した。各班（4 人設定）で iPad 1 台を使用し，どの写真で，どんな感情を表現するかを班で決め，英文にまとめる。

担当の瀬尾教諭は自ら ALT と共にデモを行い，生徒に範例を示した後，ALT と生徒のサポートにまわる。理由の部分では，班で知恵を出し合い，教師や ALT に相談するのも，班での戦略である。そして，難しい表現をいかに引き出すかは，生徒相互啓発の成果である。

ワークシートを活用し，生徒たちは写真から気分を慮り，写真の主人公に思いを馳せて発表する場を設定するのに，iPad は便利で有益なツールである。

4.【実践事例③】 自らの思いを語る－「私の尊敬する人は」素材を選び，思いをまとめ，発表する

最後に 3 年生の総まとめとしての事例を紹介する。「私の尊敬する人，生き方に影響を与えた人」というテーマで教科書に出ている文を参考にして，オリジナルのスピーチを作成し，発表する。

発表までは，3 つのステップを踏む。ステップ 1 では人の紹介・出会いを “I'm going to talk about ○○.”でスタートさせ，ステップ 2 ではその人についての人生や業績を具体的に，“He never gave up on life.”のように自分が感銘を受けたりしたことを紹介，ステップ 3 ではその人から学んだこと，これからそれを参考にやってみたいことなどを専用シートに英文にまとめる。この原稿作成と共に，パソコンルームでその自分や作品，業績がわかる画像を自分で収集する。それを iPad に入れ，自らのスピーチのツールとして活用する。

各班の iPad には，班員全員（4 名）の画像が入っているので，生徒たちは班の中で順番にそれを使い，スピーチ練習を繰り返す。これにより生徒間の相互啓発になり，互いのスピーチを聞き，質問し，感想を述べ合い，アドバイスを交わす。この練習を繰り返した後に， iPad を大型テレビに繋げて，クラス全体の前で，生徒一人ひとりがスピーチする。指導した小林教諭や ALT，生徒から質問が飛ぶこともあり，生徒は一生懸命に英語で答える。

5. まとめ

文部科学省が示す「教え合い，学び合う学習」―協働教育は，ICT を活用することで，英語授業が活性化していく。

【参考文献】
文部科学省（2011.4.8）.「教育の情報化のビジョン」.
今田晃一・大西久雄・村山大樹（2010）.「タブレット型情報端末機（iPad）を用いた授業づくりの可能性」文教大学教育研究科ジャーナル Vol.3, No.1, pp11 － 12.
田原総一朗（2010）.『デジタル教育が日本を滅ぼす』ポプラ社 .

英語教師のための
基礎講座

授業マネージメントの勘どころ：“まなざし”の共有を求めて(1)

田邉祐司　Tanabe Yuji
（専修大学）

1 はじめに

仕事柄，研究授業によく出かけますが，「上手いなぁ！」と感心させられる授業には，食い入るように見つめる生徒のまなざしと柔らかな教師のまなざしとの共有があります（吉本，1986）。先般，まなざしの共有を実践されている先生方３名と研究会で一緒になり，授業マネージメントの話で盛り上がりました。年齢，勤務する地域などバラバラで，お互いに連絡もないのですが，面白いことにそれぞれが考える授業のポイント―ここでは「勘どころ」と呼びます―には多くの共通項がありました。これは言うまでもなく先生方の勘どころが正鵠（せいこく）を射ていることに他なりません。

この小論では，３人の先生方の実践の一部を取り上げることにしました。若手の先生方には今後の授業マネージメントの糧に，そして中堅・ベテランの先生方にも何かの発見があればと考えたからです。第１回は，授業の入り口にしぼった勘どころを綴ります。

2 約束ごと

彼らの授業を参観して最初に受ける印象は，教師と生徒の間にきちんとした授業の約束ごとができているということです。むろん誰しも新学期の最初には，あれこれと授業の約束ごとをすると思います。それはマネージメントの基本ですし，また学習習慣の形成にもかかわる大切なことです。私たちも教室に「スローガン」を掲示したり，「英語授業十箇条」といったものを配布したりします。しかし３名はそうしたものを提示するだけではなく，それらをいかに生徒に自然に身につけさせるかという，一歩踏み込んだところに勘どころがあると言います。

例を挙げます。「音読のときには声を大きく！」という約束ごとは英語教室では一般的なものです。しかし，それがかけ声だけで終わっている教室が多いと思います。ところがＡ先生の授業では，「もっと声を出して！」という教師の指示は皆無です。これには仕掛けがあります。入門期に“Hello!”や“Thank you.”などの簡単な表現をペアで練習をするとき，一文を言った（音読した）後にそれぞれ一歩ずつ相手から離れるという練習をするそうです。「50cm 声」，「1m 声」，「端から端声（教室の隅から隅で対話すること）」などと名づけられたユニークな活動を通して，自分の声が相手に届いているかどうかを体感させるのです。

約束ごとを交わすにもこうした手当があるからこそ，活動に命が宿り，メリハリが生まれ，ひいてはまなざしの交錯につながっているのだと納得させられました。

3 学ぶ主体

３名に共通するもうひとつの特徴が，“You are the Learner.”，すなわち，「あなたがあなたの勉強の主人公」であるという考え方の徹底です。少し過激な例ですが，Ｃ先生は；

> *学ぶ営みは一人ではじめて，一人へもどっていく。はじめた自分ともどっていく自分とのあいだに，たくさんの人がはいっていればいるほど，学んだものは高くなり深くなる。*

という，ジャーナリスト むのたけじの言葉を新学期に投げかけるそうです。この詞を紹介した後には，“Stand on your own feet.”というイディオムを黒板に書き，その意味を説明します。そしてとどめは「生まれたばかりの子馬が立つ」ビデオクリッ

プ*です。（他にも子牛, 子鹿, キリンなどのバージョンがあるそうです！）

こうした一連のゆさぶりがあって初めて，“You are the Learner.”の意味するところが生徒には伝わるのでしょう。

4 目標の意識化

到達目標やシラバスの提示は今や定番ですが，3名はこのポイントでも，それらをただ配布するだけにとどまりません。まず彼らが重要な勘どころとして気を配るのは目標の文言そのものです。「名詞を学ぶ，動詞の使い方を覚える」などの，お仕着せの，お堅い用語ではなく，目標をより具体的な形で，生徒に理解できる言葉に「変換」するそうです。

例えばB先生のシラバスにある「疑問詞」の項目には，「whenがわかると，友達の生活がわかる！」とあります。確かに相手の「懐に入っていく」機能がある疑問詞の伝え方としては面白い変換方法です。

さらに一歩踏み込んでいるのが，目標を常に意識化させる手だてです。手法は3名とも異なりますが，A先生の場合，週の最後の授業には到達目標を自己・他己評価する時間を設けているそうです。授業でカバーした項目を緑色でマークさせ，次はそこに到達したかどうかの自己評価を青色でマークさせます。最後に，グループ内でお互いの進度，理解度［未習度］を「他己チェック」させるそうです。「パス」は水色，「要チェック」は赤色など，実にカラフルです。

目に見える形にすることで，「今いるA地点からB地点へ行こう！」といったノリで，到達地点の意識化を図っているとのことです（ちなみに「地点」は「段階」を回避した変換例）。ここでも一歩踏み込んだ勘どころの押さえ方があることが分かると思います。

5 なってほしいイメージの紹介

こうした目標の意識化を別の側面から支える手だてが先輩や卒業生の活用です。教師が「単語を覚えるのにはこうしたよ」と語ることも大切ですが，同じことを「先輩／卒業生」に語らせると，それはそれで違うゆさぶりを与えることができます。

先輩／卒業生は，ある意味，先生方のproductsです。つまり，彼らはこの授業を受けるとこうなることができる，目標をクリアしながらB地点やC地点に行くと，こんな景色が見えるようになるというエビデンスそのものなのです。

先生方の先輩／卒業生の使い方もまた三者三様です。B先生は卒業生が在校時代にどう英語と向かい合ったのか，どういう風に学習を進めてきたかなどを語ってくれたビデオをパソコンに取り込んで，投げ込みで使われるそうです。

A先生は，彼らが使った学習ノートやポートフォリオなどを教室に展示しておくのもよい刺激材料になると力説されていました。事実，先生の学校を訪問した際には教室や廊下に彼らの「作品」が展示してあり，英語を学ぶ環境づくりが出来ているなと感心しました。

C先生の学校では，年に1度の「卒業生を囲む会」を活用しているそうです。そのときには英語のみならず各教科の集いを開き，卒業生たちに昔使っていたノートや辞書などを持ってきてもらい，在校生としばし語らいの場を設けているとのことです。こうした手当が生徒のなりたいもののイメージ化を促進するとのことです。

まなざしが共有されている授業は，こんな小さな手当の集積の上に成立しているのかもしれません。

6 今回のまとめ

授業マネージメントというと, 指導の内容や方法, さらには技術などにいきおい目が向きがちですが, 大小の勘どころにおけるちょっとした気配りと手当こそが“まなざし”が共有される授業へとつながっているようです。

次回は，彼らの授業過程にさらに踏み込み，具体的な教授行動を中心に，まなざしが共有される授業の勘どころを報告する予定です。お楽しみに！

【参考文献】
田邊祐司・他（編）（2007）.『がんばろう！イングリッシュ・ティーチャーズ［自主研修ハンドブック］』三省堂 .
柳瀬陽介・他（2011）.『成長する英語教師をめざして　新人教師・学生時代に読んでおきたい教師の語り』ひつじ書房 .
吉本均（1983）.『授業をつくる教授学キーワード』明治図書 .
むのたけじ（1976）.『詞集　たいまつⅠ』評論社 .
* 子馬のビデオクリップ
http://www.youtube.com/watch?v=Q2tsuE1StHQ

Dr Negishi's Assessment Clinic
評価クリニック

Can-Doリストをどう作る

根岸雅史　Negishi Masashi
（東京外国語大学）

1. 文部科学省の「5つの提言」

文部科学省より昨年出された，「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」をご存じだろうか。そのうちの提言1に「生徒に求められる英語力について，その達成状況を把握・検証する」とある。そして，具体的施策には次のように書かれている。

> ○ 国は，諸外国の取組も参考にしながら，国として学習到達目標を「Can-Doリスト」の形で設定することに向けて検討を行う。
> ○ 中・高等学校は，学習到達目標を「Can-Doリスト」の形で設定・公表するとともに，その達成状況を把握する。国や教育委員会は，各学校が学習到達目標を設定・活用する際に参考となる情報を提供するなど，必要な支援を行う。

これらは，中・高等学校に対してなされた提言であるが，現状では中学の英語教育との相性の方がいいと言えるだろう（理由は後述する）。

2. Can-Doリストとは何か

「英語で何ができるか」を記述したものをCan-Doディスクリプタと呼んだり，Can-Doステイトメントと呼んだりする。このリストが「Can-Doリスト」である。私たちは，英語の授業では英語の単語を教えたり文法を教えたりしているが，最終的にはこれらの知識を使って，生徒には英語で何かをできるようになってほしいと考えているはずだ。

中学の教科書では，オーセンティシティの比較的高いタスクが設定され，授業ではこれらのタスクが行われることが多い。様々な言語材料は，これらのタスクの遂行のために用いられており，このイメージは中学のほとんどの教師に共有されているだろう。これが（現状の）中学の英語教育の実態とCan-Doリストの相性がいいと考える理由である。

とはいえ，日々の授業に追われていると，教科書を教えることに汲汲として，「教科書を教えることで最終的にどのような生徒を育てたいのか」ということを忘れがちである。よく「教科書を教える」のではなく，「教科書で教える」のだと言われるが，Can-Doリストの開発では，まさに「教科書で教え」て「生徒が何をできるようになるのか」が問われているのだ。

3. Can-Doリストをどう作るか

Can-Doディスクリプタは，「英語で何ができるかを記述したもの」であるから，まず教師が自身の英語使用経験を振り返ることが重要である。「書くこと」であれば，誰に向けてどんな用件でどんなタイプの文章を書いたことがあるかを振り返るのである。たとえば，「そういえば，先日うちのALTに，授業の打ち合わせのためのミーティングの日時を知らせるメールを送ったなあ」というような具合である。Can-Doのもともとの発想は，実際の言語使用から来ているから，「教科書の本文を読んだ」というようなものではダメである。本来の目的が英語学習ではなく，何かの目的のために英語を使うとならなければならない。同じ何かを読むのでも，「何かの器械の使い方がわからないから，その器械を使うために取扱説明書を読んだ」とか，「上映中の映画のうちどれを見るかを決めるために，映画の宣伝文句やあらすじを読み比べた」とならなければならない。

こうした作業を行う際に，ネックとなるのは，意

外と教師の英語使用経験が限られていることだ。これまでにワークショップをやった感じでは，ALTとのつきあいや海外研修などの経験があることから，「口頭のやりとり（spoken interaction）」はいくつも思いつくが，「口頭発表（spoken production）」や「書くこと」となると思いつく経験はそう多くない。せっかく身に付けた英語の知識だ。自分でいろいろ経験することで，生徒の目標設定にも役に立ててほしい。

こう書くと，なんだかとてもレベルの高い話で，中学生とは縁もゆかりもないような気がしてくるが，そうでもない。中学生であっても，ファストフードのメニューや簡単なポスターであれば，大半は理解できるし，名前・出身・趣味程度の内容を含んだ自己紹介であればできるはずである。

このようなCan-Doリストを，中学3年終了時をイメージして，まず作ってみてはどうだろうか。これを作成することは，目の前の生徒をどのような英語学習者・使用者にして，中学から送り出すのかと考えることになる。それがイメージできたら，今度はどのような道筋を通ってそこに行き着くかを考える。おそらく現実的なのは，次に2年終了時・1年終了時での到達点をイメージすることだろう。

4. CEFRとCEFR-J

Can-Doリストを含む代表的な枠組みで，近年注目されているものに，Common European Framework of Reference for Languages（CEFR）がある。ここでは，初学者のレベルからたくさんのCan-Doディスクリプタが提供されているので参考にしてほしい。また，このCEFRを日本の英語教育に適用したCEFR-Jも参考になるだろう。CEFR-Jは，現在Version 1がWebで公開されている（http://cefr-j.org）。CEFR-JのCan-Doディスクリプタからいくつか紹介する。

「聞くこと」A1.3：（買い物や外食などで）簡単な用をたすのに必要な指示や説明を，ゆっくりはっきりと話されれば，理解することができる。

「読むこと」A1.3：簡単な語を用いて書かれた，挿絵のある短い物語を理解することができる。

「話すこと（やりとり）」A1.3：趣味，部活動などのなじみのあるトピックに関して，はっきりと話されれば，簡単な質疑応答をすることができる。

「話すこと（発表）」A1.3：前もって発話することを用意した上で，限られた身近なトピックについて，簡単な語や基礎的な句を限られた構文に用い，複数の文で意見を言うことができる。

「書くこと」A1.3：自分の経験について，辞書を用いて，短い文章を書くことができる。

5. Can-Doリストを作ったら

仮にこのリストが中学卒業時の到達目標だとしてみよう。これらは単なる文言なので，「聞くこと」の「指示や説明」や，「読むこと」の「挿絵のある短い物語」は具体的にどのようなものかを探して決めたり，「話すこと」であれば「生徒のパフォーマンスの実例」，「書くこと」であれば「文章の実例」などを用意できるとよい。これらはベンチマークと呼ばれるものだ。

Can-Doディスクリプタが，実際に到達できたかを知るには，教師による観察や生徒による自己評価，または，テストなどを行うことになる。指導と評価の一体化ということから言えば，教師や生徒はこれらのことをある程度自信を持って評価できるようになっていなくてはいけない。この際注意しなければならないのは，Can-Doディスクリプタは，学習者が自力でできることを書いたものなので，教室の中で教師や友達などの様々な助けを得てできてしまうようなことは「できる」とは判断されない。

ただ，いざテストを作ってみると，Can-Doディスクリプタは解釈の幅がかなりある場合もあり，教師間のタスクイメージが異なることがあるので，注意が必要である。

到達目標が確定したら，それらが教科書を用いた現状の指導で達成できるか，つまり，日々の授業の積み重ねが，ひとつひとつの目標をどう達成するかを考えるのである。また，中学卒業近くなったら，生徒がこれらの目標をどのくらい到達したかを確認することになる。こうしたことの振り返りがCan-Doリスト作りでは大切であり，意義がある。

ICTと英語の授業（2）
― 言語活動（ペア・ワーク）

授業レポート CLASS REPORT

杉本　薫　Sugimoto Kaoru　（東京都立両国高等学校附属中学校）

1. それは当たり前のことですか？

最近，僕は研修会などで実践発表や指導方法について話す機会が増えている。たいていの場合，発表にICTを使う。具体的にはパソコンとプロジェクター，スピーカーである。理由は簡単で，伝える内容と方法を，時間を計算しながらコントロールできるからだ。さらに，実際に授業で使用している教材をそのまま提示できることもいい。ある程度まとまった話をするには必須と言える。自分の意図を分かりやすく伝えることができると判断している。

しかし，本当にねらったとおりの効果があるのかとなると，実は疑問もある。そのような研修会で，終了後にもらう感想の中で，未だにビジュアルを使った発表そのものに終始するものが目立つからだ。曰く「ICTを使った発表だったので，イメージがつかみやすくてよく分かった」というものだ。もちろん，最近は「伝わったらしい」イメージの奥にある論点や内容そのものについての言葉も多くはなっているのだが，そこまでたどり着かないケースも未だにある。さらに唯一の質問が「あそこのパワーポイントはどうやって動いているのですか？」となると，何の研修会だったのか自分でも分からなくなる。

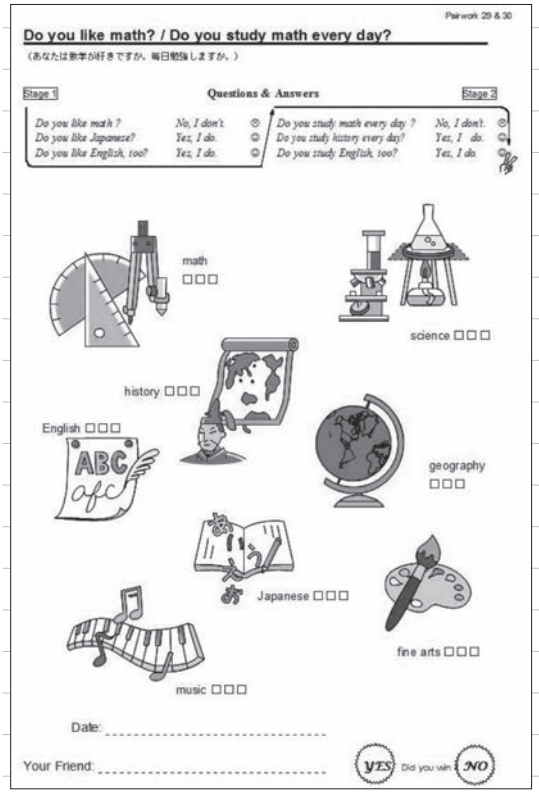
その度に，いつも僕の授業を受けている生徒はどうなのだろうかと不安がよぎる。もしかしたら学習の中身よりも，そのプレゼンテーションそのものに興味がいってしまうようなことがあるかもしれない。しかし，研修会に参加する教師と僕の授業を受ける生徒とは決定的に違いがあることを思い出して安心する。それは，生徒にとってICTを使った授業は当たり前になっていて，情報伝達の手段としてプレゼンテーションの技術や方法そのものを意識することなどあり得ない。

その生徒たちを対象に時々教育委員会からICT使用状況調査が入る。あるクラスの1週間の授業でのICTの使用状況を調べるのだが，ここで教科による差が非常に大きい。特別教室を持っている教科はある程度の数字を出しているが，普通教室で使っているのは英語だけだ。僕の場合は道徳や学活などでも時々使う。英語授業では毎時間である。頻度としては100パーセント，使用時間の割合は平均してほぼ90パーセント程度になる。だから生徒にとっては「ICTで英語は当たり前の環境」である。実は，この調査には生徒への質問として「使った方が分かりやすいか」とか「もっと使ってほしいか」などという項目があるのだが，ここでも一応肯定的なデータが出ている。しかし，「当たり前の環境」の中では，そうでないことを想像して比べながら答えるしかないのだからあまり意味がない。まあ，使われていない他教科の授業との比較はできないこともないが，それもかなり難しい話である。生徒にとっては「なんとなく」という印象で答えるしかない。

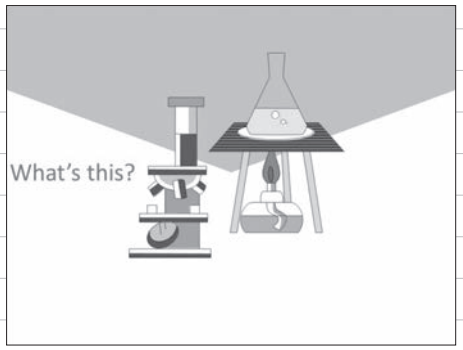
ICTを使う授業について語るということは，きちんと追い込めば，英語の授業のほとんどすべてについて語るということになる。珍しいことをとりあげるのではなく，当たり前の毎日の授業を考える，または「考え直す」ということなのだ。ICTを使った授業への評価は，「授業そのものの評価」であるということになる。その覚悟ができたときにやっとスタート地点に立ったということになる。

2. 言語活動（ペア・ワーク）の実践例

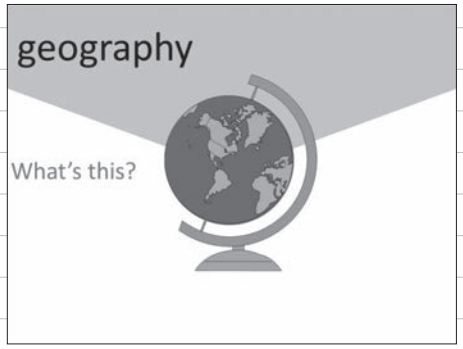
ペア・ワークの実践例を紹介する。元々次のようなワークシートを使って，口頭練習を積んでゲーム形式の言語活動を行っていたのだが，数年前から口頭練習時にパワーポイントを使ったスライド・ショーを使っている。飛躍的に活発な練習を引き出すことができることに気が付いたからだ。



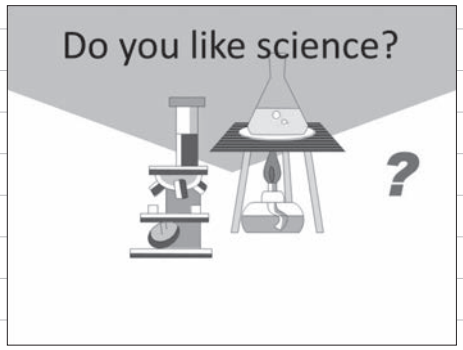
これは中学1年生の6月，“Do you like / study ...?”の練習用である。身近な教科名を選択肢に使ってpattern practiceで口頭練習，最後に相手の選んだものを当てるゲーム形式のguess workを行う。

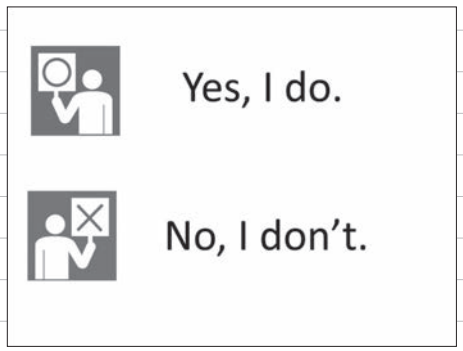


まずは，語彙の提示と練習。イラストから教科名の語彙を引き出す。文字も見せるがこの練習段階では単なる選択肢のひとつで，スペリングを覚えることを要求しているわけではない。ほとんど聞いたことのあるものだし，中学校生活に慣れてきた生徒にとっては，当たり前のように身近な語彙である。

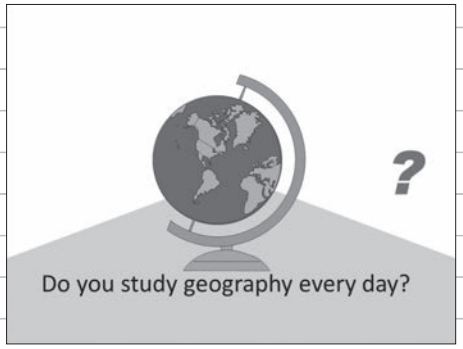


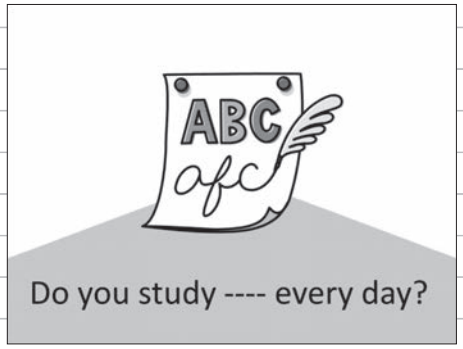
語彙が一通り言えるようになったら，次は疑問文を言う練習だ。イラストだけで，質問も返事もできるように練習させる。



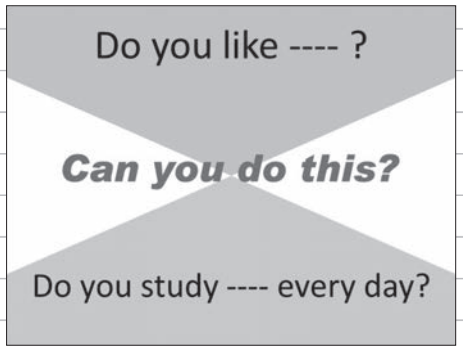


“Do you like ...?”のパターンに続いて，同じ語彙を使い，“Do you study ...?”も練習できる。

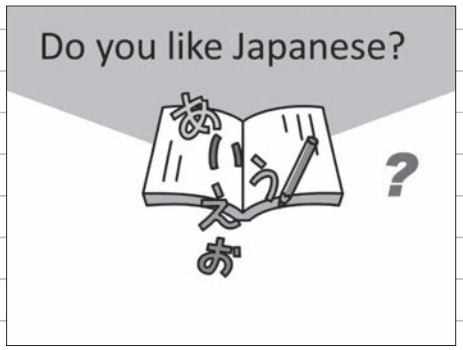




なお，一般動詞を使った言語活動では単にパターンを練習させることだけでなく，その表現が実際にコミュニケーション場面で将来使えるものであるべきだということにも留意したい。だから，ここでは疑問文としては長くなるが，“Do you study geography every day?” という習慣を扱う表現にしている。時制の理解で一番難しいのは「現在形」だ。



ここで，スライド・ショーの機能をフルに使う。ランダムに語彙を表す画像を点滅させて，素早く英文を言わせる。生徒にとってはかなりのチャレンジで集中を余儀なくされる。ステップは生徒の状況に応じていろいろ設定できる。それぞれの文型ごとにランダムな提示を行うことも，両者取り混ぜることも可能だ。



最後にもう一度今日の基本文型の口頭練習を行って，いよいよペアで guess work を行う。

Do you like math?
No, I don’t.

Do you study English every day?
Yes, I do.

スライドを使った語彙や文型の提示から口頭練習までで 10 分程度，その後のゲームで 2 分，途中に語彙や話題についての Oral Interaction を入れても 15 分の活動である。もちろん，スライドを提示している間は，生徒はしっかり顔を上げている。教師はその口元を常に確認できる。15 分の活動なら毎時間繰り返しても無理はない。語彙をどんどん増やせるし，今回の内容は，後日「三単現」の導入があれば “Does he ...?” のようにもう一度使うこともできる。15 分間の集中は，生徒にも達成感がある。もちろん，こちらは 15 分間の授業展開のプロデュースのために半日の準備が必要になる。これは慣れればもう少し短くなるし，蓄積して再利用もできる。

本稿では ICT を使った英語の指導は，授業全体の構成を考えること，言い換えれば，授業改善を目指す日常的な取り組みの文脈の中でなければ議論できないということと，毎時間積み重ねていくことが可能な言語活動を一緒に語った。次回は，この ICT 授業をさらに身近なものに引き寄せる可能性を秘めたデジタル教科書について述べる予定である。

小学校英語 Just Now

有効な小中の接続を目指して
― 足立区の小中連携への取り組み

畠山芽含　Hatakeyama Megumi
（小中教育一貫校　足立区新田学園　足立区立新田小学校）

1. はじめに

足立区立小学校教育研究会（以下区小研）は本区立全 71 校の小学校で組織され，「基礎的・基本的な知識・技能の習得と活用」「思考力・判断力・表現力の育成」を目指し，教科ごとに分かれて研究活動や授業実践を展開している研究会です。本区が重要施策とする「人間力の育成につながる学力向上」につながる授業づくりへの寄与，小学校から中学校への円滑な接続等を重点において活動を続けています。

平成 21 年度，この区小研に外国語活動部が新たに発足いたしました。ここでは主に，この外国語活動部と，その研究にかかわる本校外国語活動の取り組みについてご紹介します。

2. 外国語活動部研究内容

発足して 4 年目，まだまだ歴史の浅い部ですが，研究主題を「コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動」と掲げて研究を重ねています。

(1) 授業研究

部内組織の 1 つに研究部を設け，第 5 学年・第 6 学年と 2 つの分科会を作りました。それぞれの分科会で，年に数回行われる研究授業の指導案作りや検討会，研究主題にせまる実践的な指導法のあり方，小学校学習指導要領外国語活動の目標に沿ったねらいのある活動等を模索しながら研究を進めています。

昨年度は，次の単元でそれぞれ研究授業を行いました。

「5-2 好きなものランキングを作ろう！
（5 年　『英語ノート 1』Lesson 4）」

「できることを紹介しよう ～I can swim.
（6 年　『英語ノート 2』Lesson 4）」

「クイズ大会をしよう ～What's this?
（6 年　『英語ノート 1』Lesson 7）」

「行ってみたい国を紹介しよう ～I want go to Italy.
（6 年　『英語ノート 2』Lesson 6）」

(2) 小中連携

本区には区小研同様，区内全中学校で組織される「足立区立中学校教育研究会（以下区中研）」があります。外国語活動部はその中の 1 つである英語部と積極的に連携を図り，小学校から中学校へ円滑な接続ができるよう，より有効的な連携・連接のあり方についても検討しています。

具体的には，小中の教員が互いに授業を参観して指導方針や学習状況について共通理解を図ったり，授業検討会・研究授業・協議会等互いに参加し意見交換を行ったりしています。例えば前述の「5-2 好きなものランキングを作ろう！」では，関連のある中学校英語教員が小学校へ出向いて事前授業を行ったり，ICT 担当教員が電子黒板で操作できる“音声入りフラッシュカード”を作成したりしました。

(3) 外部組織との連携

区中研英語部との連携の他，足立区外国語活動アドバイザー（ALT に代わる日本人英語講師）や，他教科の区小研研究部等と合同研修ができる場を設け，指導法の情報交換や共通理解に努めています。特に外国語活動アドバイザーの方々には，現状を把握し適切な支援をしていただけるよう，毎月の研究会に参加していただいています。また，視聴覚部と研究を共にして，外国語の指導を通した ICT 活用の授業実践について合同研修・授業研究を行っています。

3. 小中一貫教育学校

次に，区小研の研究にかかわる新田学園の取り組みについてご紹介します。本校は平成22年に新設された，施設一体型の小中教育一貫校です。約900人の児童生徒が在籍し，互いに協力しながら（特に中学生が小学生の面倒をよくみてくれています），学校生活を送っています。

小学部・中学部の教員が同じ空間にいられることに大きな意義があり，互いの「文化の違い」も把握・理解しやすい事に加え，ちょっとした時間に児童・生徒や授業についての情報交換ができる利点があります。しかしながらこのような恵まれた環境の中でも，小学部では，中学部への有意義な接続を図れる外国語活動が実践できているのか，一方中学部でも，コミュニケーション能力の素地を活かした英語の基礎作りができているのか，それぞれ常に自問自答を繰り返している実情もあります。

(1) プロジェクト型英語活動

本校の外国語活動は，1年生から取り組みます。低学年のうちは年間10時間程ですが，3年生から週1時間，年間35時間となります。本校では，与えられた（あるいは見つけた）課題に対して，児童が解決に向けて創作や表現活動を協同で行いながら学習を進めていく，プロジェクト型英語活動を取り入れています。コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動を実践するためには，「楽しかった」だけで終わるのではなく，英語を使う必然性のある場面設定や，目標を達成するためのコミュニケーション活動であることの明示が不可欠です。

(2) 中学生・中学校教員とのかかわり

課題解決に向けて学習を進める中で，児童が単元のゴールまで関心・意欲を持続できるよう，本校では以下のような取り組みをしてみました。3年生と8年生のかかわりを例に挙げてご紹介します。

① 中学生との教材作り

「買い物をしよう」という3年生の単元で，普段から交流があり，英語の授業でも買い物学習をするという8年生と教材を一緒に作成しました。自分達の学習が中学生のお兄さん・お姉さんにもつながっているという気持ちが意欲につながりました。

② 中学生によるチャンツ

授業の始めに，買い物で使う英語表現を取り入れたチャンツを中学部英語教員に作ってもらい，中学生が歌ってくれたお手本を録音して導入に使用しました。交流のある中学生がリズムにのって元気よく歌っている声に刺激され，自分達も真似しようと楽しく意欲をもって取り組みました。

③ 中学部英語教員の出前ミニ授業

プロジェクト型英語学習で使用する英語表現を練習する際に，中学部英語教員に授業の前半参加してもらいました。テンポよく進める発音練習に，児童は終始集中して取り組みました。

(3) 中学校との関連を明記

年間指導計画の中に中学校で習う文法項目との関連についての欄を設け，この単元が将来どの学習に関係することになるのかを明記しました。このことにより，小学校教員は外国語活動と英語科における指導の系統性や継続性を認識できました。

4. おわりに

区内あるいは校内で，有効的な小中の連携・接続について研究を重ねていますが，実際はまだ手探り状態であると言えるでしょう。それでもこうして校種や教科，学校の枠を超え，関係するもの同士が集まり，意見やアイディアを出し合いながらよりよい授業づくりに向けて取り組むこの活動こそが，私たちの大きな財産になっていくものと考えています。今後は，実践の有用性を客観的に捉えられるために，研究の成果をデータ化や数値化していくなど，小中の有効な接続に向けてさらに取り組んでいきます。

Visualize it!

Michael Carr (Global Language Institute)

"What's going on?" said a recent visitor from abroad when we went to the local convenience store. For those who don't speak Japanese, a trip to the corner store can be a mind-boggling experience.

It starts when you enter the store and everyone looks up and shouts. Don't worry; they are only saying, "Welcome."

As you get in line to pay, you notice that a lot of talking is going on between the customers and cashiers. Upon closer examination, however, you realize that the customer is simply listening. What is the cashier saying? Is there a problem? Did someone forget their wallet?

It turns out the cashier is giving a play-by-play account of what is happening. Roughly translated, an example of a typical cashier monologue looks like this. "Thank you for deciding to buy something." "That comes to 800 yen, please." "I am receiving 5,000 yen." "I am giving back your change." "First, the bills. Please confirm while I count them out. One, two, three and four thousand." "Now I am giving back the coins. 200 yen." "Thank you and please come back!"

This is quite a big difference between customer service in Japan and in many Western countries. Whereas corner store clerks in many Western countries say little more than the price and "thank you", in Japan, convenience store clerks will often narrate everything in minute detail.

Does this have a purpose? Isn't it tiring for the clerk? Don't customers in a hurry find it time-consuming? Actually, when you think about it, there are several benefits to this 'cashier narration'. Not only does this put the customer at ease, but by explaining everything there is less chance of a mistake or a misunderstanding. The customer is informed of the amount of his change and therefore can speak up, if he feels there has been a miscalculation. As well, the cashier is confirming that the amount of money received and the change given are agreed upon.

Having lived in Japan for some time now, I have become used to this extra 'verbalization' as I like to call it. Sometimes I even feel a bit disappointed when I walk into a store and am not enthusiastically welcomed. I cannot speak for Japanese natives, but as a non-native, this play-by-play narration helps me understand what is going on. It is somewhat comforting to have extra confirmation.

Recently I have begun to think about the importance of confirming meaning for non-native speakers of a language. How can we apply the principles of 'verbalization' to the EFL classroom? For some non-native speakers, too much 'verbalization' can inhibit understanding. If, however, we think of the purpose of the play-by-play account at the store, we see that the convenience store clerk is adding words to actions to avoid misunderstanding and put the customer at ease.

In lessons, to achieve the same purpose, I do the opposite; i.e. I add actions to my words. Instead of 'verbalization', I practice 'visualization'. By adding a gesture or visual clue to what we say, we can help students confirm what they hear.

One of the biggest obstacles to communication in a foreign language is a lack of confidence. Students often doubt their ability and question themselves about what they think they heard. "Did the teacher just ask me my name or my friend's name?" "Does the teacher want me to tell him the day or the date?"

Ask a class to stand up, for example, and you will see hesitation in their faces. The students understand the command, but no one wants to execute it, just in case they are wrong. Add a gesture, and you see a look of relief on the students' faces as they confidently stand up.

The trick is to ensure there is a slight time lag between the verbal and visual or else the students will never have to listen, but simply follow the gestures.

To sum up, provide extra support, but don't let your actions speak louder than words.

聞いて「わかる!」を実感させる指導

― チャンクの活用

椎名紀久子　Shiina Kikuko
（千葉大学）

1. はじめに

リスニングはスピーキングやリーディングの力も伸ばすことのできる重要なスキルです。しかし，日本人英語学習者の多くは，「英語は速くて聞き取れない」，「単語が全部つながって聞こえる」と言って，リスニングは苦手と感じています。その原因の1つは，英語を「語単位」で聞き取ろうとするために，途中から記憶しきれなくなり，「速い！」と感じてしまうのです。そこで「チャンク単位」の聞き取りからはじめるリスニング指導を紹介したいと思います。

2. チャンクとは

チャンクとは，「意味を持つ“語のかたまり”（2～5語程度）」のことで，“Thank you very much.”などの慣用表現はその典型例です。この表現を4つの単語に分けて聞く人はいないでしょう。「ありがとう」を意味する1つのかたまり「チャンク」として記憶しているので，楽に認識できます。チャンクには慣用表現以外にも，「コーパスで高い頻度で現れる語の組み合わせ」，「必ずしもコーパスの出現頻度は高くないが意味のある語のかたまり」などがあります。

3. チャンクの学習法について

新出単語の発音と意味を確認したあと，その単語を含むチャンクを提示し，音声と意味を確認します。チャンクを「聞いてすぐに意味がわかる」ようにしておくと，聞き取りの負担が軽減します。まとまりのある英文のリスニングに成功する鍵は，①「聞いてすぐに意味が分かるチャンク」の数を増やすこと，②いくつかのチャンクをつなぎ合わせて「聞いた順に理解していく直聴直解の力」を育てることです。

4. チャンク重視のリスニング指導例

平成24年度版*NEW CROWN*のリスニング活動に限り，指導書にチャンクが和訳とともに「チャンクリスト」にまとめられています。*Book 1* LESSON 9 USE Listenの昔話「浦島太郎」では，次のチャンクリストを掲載しています（抜粋）。

Long ago　遠い昔
⋮
Thank you.　ありがとう
go under the sea　海底に行く
The man and the turtle　男とカメ
went into the sea　海に潜っていった

タスクの前に，次の手順で学習させましょう。

1）教師：各チャンクを2回以上連続して発音する。
2）生徒：チャンクを聞きながら意味の確認をする。
3）生徒：教師のチャンクの発音を復唱して，「耳慣らし」「意味理解」「口慣らし」をする。
4）生徒（協働学習）：ペアでチャンクを発音して和訳をしたり，和訳からチャンクを言ったりする。

そして，聞き取りを助けるタスクとして，「助けられたカメは漁師に何と言い，そのあとふたりはどうしましたか」と質問し，チャンクリストで学習した“Thank you.”，“go under the sea”，“The man and the turtle”，“went into the sea”を思い出させて，答えを探させます。

5. おわりに

チャンクを活用すると，英語は速くても聞き取れるようになり，またリーディングそしてスピーキングやライティングの基礎力にもなっていくでしょう。

お知らせ

英語教科書・教育情報 Web サイトのご案内

三省堂英語教科書 Web サイトでは，授業をサポートする資料や英語教育に関する情報（コラム，研究会情報など）を掲載しております。ぜひご活用ください。

三省堂英語教科書 Web サイト
http://tb.sanseido.co.jp/english/index.html
NEW CROWN ページ
http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/index.html

【サポート資料の例】※ダウンロードしてお使いいただけます。
- Q&A 集・使い方ガイドブック
- 移行措置資料
- 年間指導計画表
- 評価規準一覧表・評価事例集
- NEW CROWN 題材リンク集
- 補充発問例・テスト問題例など
- 小中の連携（外国語活動と NEW CROWN）

NEW CROWN ENGLISH SERIES（平成 25 年度用）修正のお知らせ

NEW CROWN 1年の見返し「Schools around the World」は，さまざまな地域の子ども達が学校生活を楽しんでいるようすを写真で紹介しています。その中の「活発な授業（マラウイ）」の写真につきまして，アフリカ地域に対するステレオタイプ化された見方を助長する可能性があるとの判断で，文部科学省，マラウイ大使館の了解のもと，平成 25 年度供給の教科書より右の写真に差し替えをいたします。ご指導にあたっては，その点を踏まえたお取り扱いをお願い申し上げます。

TEACHING ENGLISH NOW
23 号
2012 年 9 月 1 日発行
定価 80 円（本体 76 円）

編集・発行人：北口克彦
発行所：株式会社三省堂
〒101-8371　東京都千代田区三崎町 2-22-14
電話（03)3230-9422（編集）
振替　東京 00160-5-54300
［NEW CROWN ホームページ］
http://tb.sanseido.co.jp/newcrown/index.html
印刷：三省堂印刷株式会社
〒192-0032　東京都八王子市石川町 2951-9
電話（042)645-6111（代）

編集後記

今号では，特集と授業レポートで，教育現場で今話題の ICT の活用法をご紹介しました。すべてに共通していたのは，あくまでも ICT は手段であるということ。これは，様々な電子機器であふれている私たちの日常生活全般においても言えることかもしれないと思いました。（な）

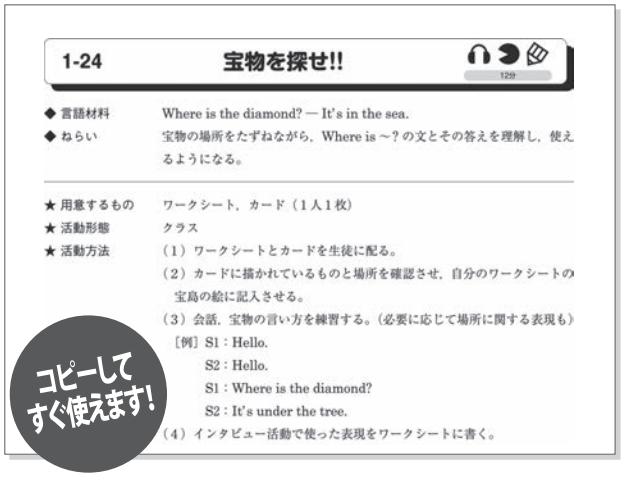
NEW CROWN ENGLISH SERIES 充実の指導用教材

アクティビティアイディア集 ❶❷❸

◆各学年 B5判 ◆1年 128頁 2年 136頁 3年 128頁 ◆定価（本体 2,200円＋税）

◆ 教科書の言語材料の配列に合わせた活動ができます。
◆ 教科書の各セクションごとに，コミュニケーション活動を活性化するための多彩なアクティビティを収録。
◆ 授業ですぐに使えるワークシート形式になっています。

●教師用の解説ページ



1-24 宝物を探せ!!

◆ 言語材料　Where is the diamond? — It's in the sea.
◆ ねらい　宝物の場所をたずねながら，Where is ～? の文とその答えを理解し，使えるようになる。

★ 用意するもの　ワークシート，カード（1人1枚）
★ 活動形態　クラス
★ 活動方法
（1）ワークシートとカードを生徒に配る。
（2）カードに描かれているものと場所を確認させ，自分のワークシートの宝島の絵に記入させる。
（3）会話，宝物の言い方を練習する。（必要に応じて場所に関する表現も）
［例］S1：Hello.
S2：Hello.
S1：Where is the diamond?
S2：It's under the tree.
（4）インタビュー活動で使った表現をワークシートに書く。

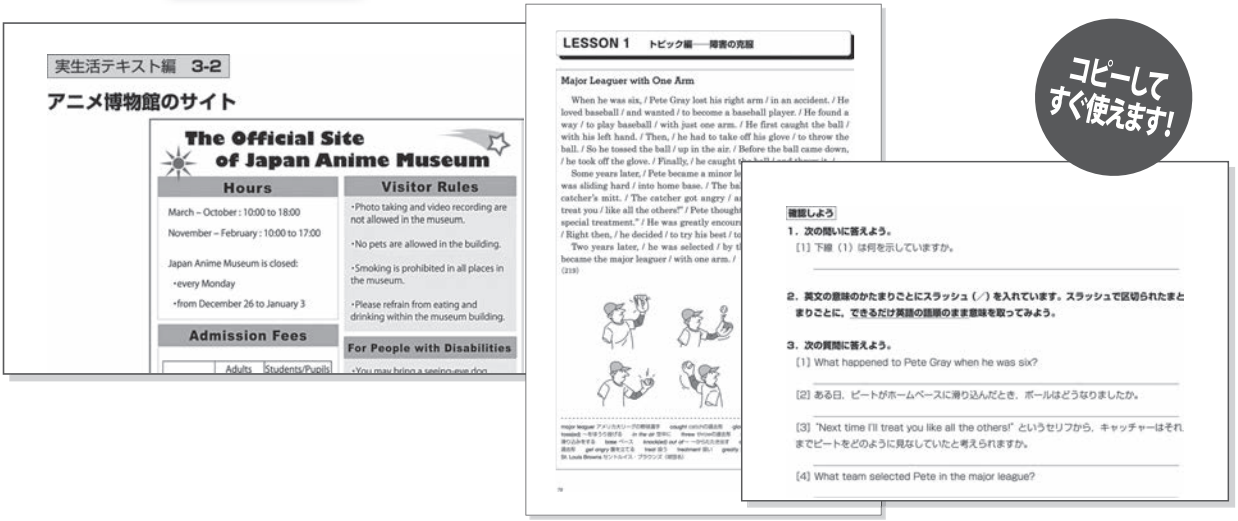
コピーして すぐ使えます！

●生徒用のワークシート

リーディングアイディア集［全学年対応］ NEW

◆B5判 ◆192頁 ※三学年分1冊にまとめました！ ◆定価（本体 2,800円＋税）

◆ 教科書の進度に合わせたリーディングの教師用素材集です。
◆ 文法を重視した読みもの(文法編)，内容を重視した読みもの(トピック編)，その他の素材(実生活テキスト編)と，多彩な設問を設けました。
◆ コピーして配布できるレイアウトになっています。
◆ 題材の背景や指導法などの解説付き。



平成 24 年度版

NEW CROWN❶❷❸ 指導用デジタルテキスト

みんなで見る大きな教科書でさらに，「教えやすく，学びやすく」

Point 1 教科書をそのまま再現！

★教科書紙面と同じものを拡大して表示します。

Point 2 ワンクリックで簡単に紙面拡大！ 音声再生！

★各パートや写真・イラストを拡大し，本文全体や文・単語，リスニング問題を再生できます。

Point 3 授業の流れを考慮した教材アイテムの配置！

★ムービー，ピクチャーカード，フラッシュカードが随所に入っています。

各学年
価格（本体 76,000 円＋税）

※学校フリーライセンス
本ソフトウェアは，お買い上げいただいた学校内でのご使用に限り，インストールするコンピュータの台数を制限しないでお使いいただくことができます。

【動作環境】
OS Microsoft® Windows®XP 以上
CPU Intel Pentium®4　1.3GHz 相当以上推奨
メモリ 512MB 以上推奨（Windows® Vista の場合 1GB 以上推奨）
システムドライブ 200MB 以上推奨
モニタ 1024*768/24bit 以上推奨
サウンド サウンドカード・スピーカー
DVD-ROM ドライブ DVD-ROM から起動する場合 24 倍速以上推奨
ハードディスク必要空き容量 HDD から起動する場合 1GB 以上
※Microsoft® Windows® は，米国マイクロソフト社登録商標です。
※Pentium® は，米国インテル社の登録商標です。

三省堂
http://www.sanseido.co.jp/

□本　社　〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14　TEL 03（3230）9411（編集）・9412（営業）
□大阪支社　〒530-0002 大阪市北区曾根崎新地 2-5-3　TEL 06（6341）2177
□名古屋支社　〒460-0008 名古屋市中区栄 3-25-43 瑞穂ビル 4F　TEL 052（252）9211・9212
□九州支社　〒810-0012 福岡市中央区白金 1-3-1　TEL 092（531）1531・1532
□札幌営業所　〒060-0042 札幌市中央区大通西 15-2-1 ラスコム 15 ビル 3F　TEL 011（616）8722